

『駐日ドイツ大使フォン・ヴェアテルン氏の講演を聴いて』

清水薫美

梅雨空の向こうに微かに太陽が感じられる6月22日の午後、私は久しぶりに東京外国語大学のキャンパスを訪れた。ドイツ語科出身の友人に誘われ、駐日ドイツ大使フォン・ヴェアテルン氏による講演を聴くために。ここに来るのは数年前聴講生として通って以来である。

講演テーマは「EU 諸問題とドイツ」。大使は EU 設立の理念からその抱える諸問題までわかりやすく解説して下さった。その日はたまたまイギリスの EU 離脱問題の国民投票の前日であった。その後、周知の通りイギリスは EU 離脱を決めたのである。実は、大使の奥様はイギリス人とのことで、家庭内での議論も交えてユーモアたっぷりに話された。

まずは、EU の歴史から話が始まった。第二次世界大戦後、主要国が二度と戦争をしないように「平和プロジェクト」として EU が誕生したこと。EU 域内の共通市場が加盟国の経済的範囲を拡大し、その結果世界経済が恩恵を受けたこと。さらには、加盟国間のソーシャル・ネットワークが存在し、社会的厚生の上昇や社会保障の充実に貢献してきたこと。そして、EU には官僚主義や EU 本部細則の順守といった影の部分があるが、同時に同一通貨等の域内の自由な経済が EU に多大な繁栄をもたらしたと述べられた。

しかしながら、現在 EU は国際テロ・難民問題・社会格差・金融危機・地球温暖化などさまざまな問題を抱えている。特に難民問題は深刻だ。これらの問題を解決するためには EU 加盟各国が協働で取り組む必要があり、話し合いによって互いに譲歩・妥協しながら良い解決策を見いだしていくべきだというまとめの言葉で話を終えられた。

講演の後、私はバツハ・コレギウム・ジャパンの指揮者である鈴木雅明氏の言葉を思い出した。その言葉は「私の国籍は天にある。」国籍が天にあると考えるなら、全ての人は天という一つの共同体に属することになる。すなわち、今こそ私たちは人種・国籍・宗教・文化等さまざまな違いを乗り越え地球市民として一致団結すべき時である。分断でなく融和を目指すことが肝要だ。

日本では古来、言葉には不思議な力が宿るため言霊と言われている。怒り・憎しみ・嫌悪などネガティブな言葉を用いるとネガティブな波動が広がっていく。反対に、愛・思いやり・優しさなどのポジティブな言葉を用いるとポジティブな波動が広がっていく。

講演会にはたくさんの現役大学生が参加していて、中にはネイティブ並みに流暢なドイツ語で質問する学生もいた。この日本の未来を背負う若者たちが言葉を花束のように用いて世界の他の国々と手を取り合い、美しい地球を守っていくことができますようにと、私は心から願った。

(元東京外国語大学聴講生 昭和 58 年早稲田大学第一文学部卒)